

上代の「ゆゑ」の性格

やん ちよん
楊 瓊

同志社大学大学院博士課程後期課程

キーワード

形式体言, 接続表現, 目標, 順接, 逆接

要旨

本稿では、『万葉集』における「ゆゑ」を用いた歌を取り上げ、特に逆接の意味に解釈されることがある歌を再検討することを通して、上代の「ゆゑ」の文法的性格を考える。上代の「ゆゑ」は、「ため」と同様に目標を示すことができる点で、中古以降の「ゆゑ」より用法上の広がりをもつことを述べる。「ゆゑ」が逆接に解釈される歌においては、「ゆゑ」が実質名詞の性格を帯び、未だ因果関係を表す論理的な接続表現となっておらず、偶然的原因を示すにとどまっていると考えられる。それに加えて、「ゆゑ」の前接体言の修飾語に打消表現や消極的表現を用いたことで、前件と後件の内容が対比的に捉えられることになり、全体が逆接のように理解されたのである。

1 問題提起

中古以降、一般的に順接の原因理由を表わす接続表現として用いられる「ゆゑ」は、上代において、逆接に解釈される例が多く見られる。例えば、『万葉集』の21番歌、

紫の にほへる妹を 憎くあらば 人妻故に (人孀故尔) 我恋ひめやも (1・21)

上記の歌に関して、26種の注釈書を調べると⁽¹⁾、山田(講義)、澤瀉(注釈・新釈)⁽²⁾、土屋(私注)⁽³⁾は下記のように順接と解している。

紫草の色めでたき如きうるはしき妹をにくく思はば、人妻に対して恋する如き危険なることをわれはせむやは。(君の色めでたきによりてこそ、人妻を思ふは道ならずと思ひつつも恋はするよ。)

山田(講義)

しかし、これら以外の22種の注釈書においては、いずれも「ゆゑ」を「なるものを」「だのに」のように、逆接的に解釈している。

……人妻であるのに、私はかくも恋しく思うだろうか。(新日本古典文学大系)

『万葉集』における「ゆゑ」の用例を見ると、体言接続の例が62例ある⁽⁴⁾。その中で、従来の注釈書で順接にしか解釈されていない用例は19例であるのに対して、逆接に解されたことがある歌は43例あり、「ゆゑ」の用例の多数を占めている。辞書類でも、「ゆゑ」の逆接用法を積極的に認めるものは少なくない⁽⁵⁾。しかし、「ゆゑ」に逆接の用法があるという説が正しいければ、中古以降の「ゆゑ」に逆接の用法が殆ど見られなくなったことは大きな疑問となってくる。

そこで本稿では、『万葉集』における「ゆゑ」の用例を取り上げ、特に逆接に解釈されること

がある歌を再検討し、文法機能と意味用法の面から、上代の「ゆゑ」の特質を考える。筆者は、『万葉集』の「ゆゑ」は中古以降の因果関係を表す接続助詞の用法とは異なり、「ため」と文法上の共通性を持ち、体言接続の場合、前接語とともに後続事態に含まれる希求的動作の目標を示す用法があることを主張する。また、上代の「ゆゑ」は実質名詞の性格を強く帯びており、接続表現的に用いる場合も、偶然的原因を表すにとどまっていたと考える。さらに、「ゆゑ」の前件に打消表現や消極的表現が加わると、前件と後件が対比的に捉えられ、全体が逆接に解釈されることを述べる。

2 先行研究の検討

前述したように、『万葉集』における「ゆゑ」には、順接に解釈される説と逆接に解釈される説とがある。

橘（1928）は、奈良・平安時代の歌における「ゆゑ」を「順態」「逆態」「順逆中間態」の三つの用法に分け、それぞれの用法と対応する主な構造は「体言＋ゆゑ」、「打消＋体言＋ゆゑ」、「（消極的）修飾語＋体言＋ゆゑ」であるとし、打消表現を伴う構造が逆態用法の最も著しい標識であるとしている。さらに、馬（2015）は、「ゆゑ」の前件が打消を含む修飾語を伴う場合、前件に表現された現実が一般的期待を否定していることによって、逆接のギャップが発生するとしている。橘（1928）や馬（2015）においては、「ゆゑ」を逆接に捉える理由を、前件の構造や表現に求めていると思われるが、後件とのかかわりは十分説明されていないと考えられる。

吉野（1990a）は、逆的に訳される「ゆゑ」が「修飾語句＋体言＋ゆゑ」と「人妻ゆゑ」の形態に偏在する理由は、この「修飾語句＋体言＋ゆゑ」の形態においてモノとして示されるものを、後件と同一の資格を持つ句的事態の表現として扱い（例えば、「吹かぬ風ゆゑ」を「風吹かぬゆゑ」として扱う）、前件と後件が対立関係であるため、「逆的原因」と捉えられるのであると述べている。ただし、「吹かぬ風ゆゑ」といった表現は、句的事態の「風吹かぬゆゑ」を完全に等価的な表現ではない。例えば、類似表現の「ため」が用言接続の場合では、

我が袖に あられたばしる 巻き隠し 消たずてあらむ 妹が見むため（妹為見）（10・2312）
必ず推量の助動詞「む」に付くように、「から」が用言接続の場合では、

ただ一夜 隔てしからに（隔之可良尔） あらたまの 月か経ぬると 心惑ひぬ（4・638）
必ず過去の助動詞「し」に付くように、上代では条件句内に時制の法則が見られる。これらと同じように、「吹かぬ風ゆゑ」を句的に言い換えると、「風吹かざりしゆゑ」のように「し」を補わないと、後件の「開けてさ寝にし」（11・2705）という過去の事態との間に、時間的照応に不備が生じるのである。一方、「修飾語＋体言＋ゆゑ」という構造は、「体言」を中心とした凝集性の高い表現である⁽⁶⁾。前件における修飾語句は、体言の属性を修飾・限定するものであり、述語として後件の理由になるわけではない。そのため、句的な捉え方と同一に考えることはできないと考えられる。

「ゆゑ」を逆接的に理解しようとする説に対して、「ゆゑ」を順接用法として積極的に捉えようとする説がある。山田（講義）では、逆接的な解釈は「歌全体の意より推したる」ものであり、

「ゆゑ」の訳とすべきではないと述べている。澤瀉（注釈）も、作者自身は「……のために……する」という「事実」を述べたものにすぎないのであり、逆接的な解釈は「第三者の常識」や「理屈」を歌語の解釈に含ませたものであると述べている。また、志村（1931）は、『万葉集』の「ゆゑに」は「為に」に訳せ、すべて「その原因するに云ふ接尾語なり」と指摘している。これらの研究では、「ゆゑ」が「ため」に訳せるとしている点に注意すべきである。

このような「ゆゑ」が「ため」に訳せるとする指摘に対しては、「ゆゑ」が原因・理由を示す用法であり、「ため」が目的を示す用法であることから、両者を区別すべきとする説もある⁽⁷⁾。しかし、吉野（1990b）は、古代日本語における用言を受ける「タメ」は、必ず「……ム（ガ）タメ」の形をとっており、「ム」が意志・希望であるときは「……したいので」、推量のときは「……するだろうから」の意味を表していると指摘している。つまり、「タメ」は未然的理由として説明でき、広義的理由の中に包摂できるものと考えられる。

確かに、「ゆゑ」と「ため」が原因理由の接続表現として定着するようになった段階では、「ため」は未然理由を示し、「ゆゑ」は已然理由を示す傾きがあるが、これは用言接続の場合、前件と後件の発生に前後関係が見られるときに限られ、前件がすでに存在する人物を表す体言を受ける場合では、必ずしもそうではないと考えられる。後節にもふれるように、『万葉集』において、体言に付く場合、「ゆゑ」の用例の多くは、「あるものに対して、或いはあるものを目標として、ある行為が行われる」という用法であり、それは「ため」の働きと同じである。つまり、「ゆゑ」と「ため」は類同した文法機能を持つ語であると考えられる。以下、「ゆゑ」の本質を述べる上で、「ため」と重なり合う用法を検討したい。

3 『万葉集』の「ゆゑ」は果たして接続表現であるか

『万葉集』における「ゆゑ」の解釈について、従来順接か逆接かというふうには、接続助詞の用法であることを前提として検討されてきた。しかし、上代において、体言に接する「ゆゑ」は果たして本格的に文法化した接続助詞になっていたのかについては、慎重な検討を要する。

山田（講義）では、122番歌の「人の児ゆゑに」について、

古の語遣の今と異なる点は其「故」をば今は抽象的に「理由原因」といふ形式的な語とする
に対して、古は其理由原因たる具象的事実をも含みたる意に用いたりと考へらる。されば、
古語の「ゆゑ」は恋ならば「恋の故」他の事ならば「その事の故」といふ意をあらはしたる
べし。

という注釈を施している。つまり、上代の「ゆゑ」は本義の実質名詞「原因・理由」の意が相当に遺存し、まだ文法的な接続表現となっていないと考えられる。「ゆゑ」が本格的な接続表現となっていないからこそ、文脈によって順接的にも逆接的にも解釈できるのではないかと考えられる。

また、生野（1961）は、平安時代の「ゆゑ」は万葉時代の補助的な用法から次第に独立的な用法に移行する傾向が見られると述べている。中古和文では、上代のような形式名詞的用法が少なく、「縁故・由緒」や「情趣・風情」の意を持つ実質名詞の例がより多く見られるようになった。

中古和文の使用状況から推して、上代では、「ゆゑ」が原因理由の接続表現になっていた可能性が極めて低いと考えられる。

以上のことから、上代の「ゆゑ」を接続助詞とし、順接であるか、逆接であるかのような解釈は危険であると考えられる。講義では「人妻ゆゑに」を「人妻に対して」に訳し、新釈では「人妻であるあなたを、……恋しく思はうか」に訳し、櫛の柚、講説では、「人妻であるのに、そのあなたのために」のように、「ために」を補って訳していることから、「ゆゑ」は前接語である「人妻」に形式的な意味として、「……に対して」「……を求めて」のような意味を添え、全体として修飾節を作り、「恋ひめやも」を修飾していると解釈できる。このような目標を示す用法について、次に考える。

吉野(1990c)は、訓点資料と『今昔物語集』のような仏教関係の文章において、「故」は「為」と同じく、原因・理由を示す用法とともに、目標・目的を示す用法を併せ持つものであったと指摘している⁽⁶⁾。このように、「ゆゑ」が目標・目的を示す用法は、仏教系の資料だけではなく、後述するように、『万葉集』においても、数多く見られる。

その根拠として、「誰がゆゑ」の歌と類同する「誰がため」の歌を挙げてみる。

1 鈴鹿川 八十瀬渡りて 誰が故か (誰故加) 夜越えに越えむ 妻もあらなくに (12・3156)

1' 楽浪の 大山守は 誰がためか (為誰可) 山に標結ふ 君もあらなくに (2・154)

2 水底に 沈く白玉 誰が故に (誰故) 心尽くして 我が思はなくに (7・1320)

2' 朝霜の 消易き命 誰がために (為誰) 千歳もがもと 我が思はなくに (7・1375)

上記の4例において、「誰がゆゑ」は「誰がため」と同様に、いずれも後件の打消表現と呼応して、構造も、表現も類同している。これらの例において、「ゆゑ」と「ため」が前節語とともに、「夜越ゆ」「標結ふ」「心尽くす」「千歳もがも」のような動作や願望の目標・対象を示しており、「ため」と「ゆゑ」は共通した側面をもつことは確かだと考えられる。

ただし、「ため」と「ゆゑ」は、完全に同様な表現ではない。『万葉集』の用例を見ると、「ため」は将来の利益となることに用いられやすいのに対して、「ゆゑ」は望ましくないことに用いられやすい傾向がある。これは「ため」(「利益・得」と「ゆゑ」(「故障・災禍」)の本義と深く関わっていると考えられる。このように、『万葉集』における体言接続の場合では、前後文脈の時間的關係より、むしろ本来の意味によって「ため」と「ゆゑ」が使い分けられていると推測されるが、本稿は両者の文法上の共通性を中心に論を進めたい。

4 『万葉集』における「ゆゑ」の用法

以上のことを踏まえて、ここでは、「ゆゑ」の文法上の働きによって用例を分けてみる。「ゆゑ」の歌に、前述した「ため」と同じく、前接体言が後続事態の【目標・対象】であることを示すものが多く見られるが、前接体言が後続事態の【原因・理由】であることを示すものも一部見られる。

4.1 【目標・対象】

「ゆゑ」が【目標・対象】を示す用法である歌は、『万葉集』に47例見られる。「ゆゑ」の

前接語に人を表す名詞を受けることが多く、後続の希求的動作の目標物・対象物として示しており、「……を求めて」「……を思って」「……に対して」のような意味を表している。これらの歌全体は、「ある物事を追い求める目標として、それに対して、ある動作が行われる」として理解できる。つまり、「体言+ゆゑ」が後続動作作用の補足語の立場にある。以下、前接部分の構造の種類によって、用例を挙げつつ述べる。

①〔体言+ゆゑ〕13例

『万葉集』では、前接部分が〔体言+ゆゑ〕の形をとる歌のうち、【目標・対象】を示す歌が13例見られる。

- (1) 大空ゆ 通ふ我すら 汝が故に (汝故) 天の川道を なづみてぞ来し (10・2001)
- (2) 鈴鹿川 八十瀬渡りて 誰が故か (誰故加) 夜越えに越えむ 妻もあらなくに (12・3156)
- (3) 我が故に (和我由惠尔) 思ひな瘦せそ 秋風の 吹かむその月 逢はむもの故 (15・3586)

上記の例(1)は、「大空を通う我さえ、汝のことを思って、天の川道を苦勞してきた」という意味で、「汝」が「天の川道を苦勞して(逢い)にきた」行為の相手であり、後続動作の目標・対象と考えられる。例(2)は「誰を求めて夜越えなどしようか」という意味で、「誰」が「夜越えなどをして」逢うに行く対象である。例(3)の後件は禁止表現をとっており、「我のことを思いすぎて瘦せないでください」という意で、「我」が「思ふ」行為の目標である。これらの例では、前件が後続事柄の原因・理由というよりも、前件を目標・対象として何かをして捧げるといったほうがよいと考えられる。

これらの例の後続動詞を見ると、「思ひ瘦せる」「利心の失するまで思ふ」「嘆く」のような精神的に恋悩む対象を表す歌が8例、「なづみて来し」「夜越え」「行く」のような距離的接近の目標を表す歌が3例、そのほか、「雄鹿踏み起こしうかねらひかかもすらく」「紐解かず寝む」のような相手を追い求めるための具体的動作の相手を表す歌が2例見られる。

②〔(積極的意味を含む)連体修飾語+体言+ゆゑ〕3例

〔(積極的意味を含む)連体修飾語+体言+ゆゑ〕の構造を持つ歌が3例であり、「ゆゑ」がいずれも【目標・対象】を示す用法である。

- (4) 大舟の 思ひ頼める 君故に (君故尔) 尽くす心は 惜しけくもなし (13・3251)
- (5) …夏草を 腰になづみ いかなるや 人の児故そ (人子故曾) 通はずも我子… (13・3295)
- (6) 筑紫なる にほふ児故に (尔抱布兒由惠尔) 陸奥の 香取娘子の 結ひし紐解く (14・3427)

例(4)は「大船のような頼みになる君に対して、捧げる心は惜しくもない」と訳せ、「君は「心を尽くす」対象である。例(5)は父母の発言の部分であり、「人の児」は親の庇護の下にある娘という意味であり、「どのような人の娘を求めてお通いか、わが息子よ」と訳せる。例(6)は「筑紫の美しい娘さんを求めて、陸奥の香取娘子の結んでくれた紐を解く」という意味である。前件がそれぞれの後件「心を尽くす」「通う」「紐を解く」といった相手の恋心に基づく能動的行為の目標・対象を提示していると考えられる。

③〔(消極的意味⁹⁾を含む)連体修飾語+体言+ゆゑ〕12例

〔(消極的意味を含む)連体修飾語+体言+ゆゑ〕の構造を持つ歌のうち、12例が【目標・対

象】を示す用法である。

- (7) 朝霧のおほに相見し人ゆゑに(人故尔) 命死ぬべく 恋ひ渡るかも (4・599)
- (8) はだすすき 穂には咲き出ぬ 恋を我がする 玉かぎる ただ一目のみ 見し人故に(視之人故尔) (10・2311)
- (9) …倭文たまき 賤しき我が故(賤吾之故) ますらをの 争ふ見れば 生けりとも… (9・1809)
- (10) …百足らず 八十の衢に 夕占にも 占にもそ問ふ 死ぬべき我が故(應死吾之故) (16・381)

例(7)は「朝霧のように、ぼんやりと見ただけの人に対して、死ぬほど激しく恋いつづける」という意であり、例(8)は「ただ一目だけ逢った人に対して、人目を忍ぶ恋をする」という意であり、例(9)は「……数ならぬ私のことを求めて、ますらおが争う……」という意であり、例(10)は「(母が)八十路の辻で、夕占やら占やりに問うのでしょうか、死にそうな私のために」という意である。具体動作の相手を表す例(9)と例(10)を除くと、ほかの10例はいずれも「恋渡る」「嘆く」のような精神的行為の目標・対象を表す例である。

また、この類には、「朝霧のおほに相見し人ゆゑ」(4・599)「暁闇のおほほしく見し人故」(12・3003)「ただ一目のみ見し人故」(10・2311)(12・3075)「ただ一目相見し児故」(11・2565)の例が多く見られ、いずれも間柄が深くない人のために恋心を燃え上がらせた歌である。これらの例において、「ゆゑ」は本来的に後続動作の目標を示すものであるが、解釈によってその目標物が偶然的原因となって、後続動作を引き起こす契機ともなっているようにも解される。

④〔「人妻ゆゑに」歌〕11例

この類には、「人妻」のほかにも、意味が類似する「人の児」、および「人妻」の譬えと考えられる1301番歌、意味が同じ2599番「夕されば人の手まきて寝らむ児」の歌も含み、計11例ある。「ゆゑ」がいずれも【目標・対象】を示す用法である。

- (11) うちひさす 宮道に逢ひし 人妻故に(人妻妬) 玉の緒の 思ひ乱れて 寝る夜しそ多き (11・2365)
- (12) 大舟の 泊つる泊まりの たゆたひに 物思ひ瘦せぬ 人の児故に(人能兒故尔) (2・122)
- (13) 海神の手に巻き持てる 玉故に(玉故) 磯の浦回に 潜きするかも (7・1301)

例(11)は「宮道で逢った人妻のことを思って、心が乱れて寝る夜が多い」という意味である。例(12)は「……他人の女のことを思って、やせてしまった」との内容である。例(13)は玉に寄せる譬喩歌であり、「玉」は「親の秘蔵する娘または人妻」の譬(新編)とされ、「海神が手に巻持っている玉を求めて、磯の浦辺で水に潜る」という意である。

この類の歌において、例(13)の「潜きする」という具体動作を除き、「ゆゑ」がいずれも「恋ふ」「思ひ乱れる」「物思ひ瘦せる」のような精神的状態の目標・対象を表している。

⑤〔(打消表現を含む)連体修飾語+体言+ゆゑ〕10例

先行研究で述べたように、逆接に捉えられる「ゆゑ」の前件に修飾語句が伴われ、特に打消表現が含まれる特徴が見られた。しかし、前件を後件動作の目標・対象として考えると、順接か逆

接かの問題は解消できる。〔(消極的意味を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕の構造をとる歌のうち、10例が【目標・対象】の用法である。

- (14) …夕霧に 衣は濡れて 草枕 旅寝かもする 逢はぬ君故 (不相君故) (2・194)
(15) 相思はず あるらむ兒故 (将有兒故) 玉の緒の 長き春日を 思ひ暮らさく (10・1936)
(16) すずき取る 海人の燈火 よそにだに 見ぬ人故に (不見人故) 恋ふるこのころ (11・2744)
(17) はしきやし 吹かぬ風故 (不吹風故) 玉くしげ 開けてさ寝にし 我そ悔しき (11・2678)
(18) はなはだも 降らぬ雨故 (不零雨故) にはたつみ いたくな行きそ 人の知るべく (7・1370)

例(14)は「逢えない夫君を求めて、夕霧に衣はしつとりと濡れて旅寝をなさるか」という意味である。例(15)は「思ってくれていそうにない兒に対して、長い春日を思い暮らすことか」という意味である。例(16)は「海人の燈火のように遠くからさえも見せぬ人に対して、恋するこのごろだ」という意味である。例(17)は「寄物陳思歌」であり、「吹かぬ風」は「逢わぬ男」の譬えであり、全体は「吹かない風のために、戸を開けて寝た私が悔まれる」という待つ女の歌である。例(18)は、雨に寄する譬喩歌であり、私注では「はなはだも降らぬ雨」は「深くもない間柄」の譬えとし、「にはたつみ」は「夕立のために庭にたまっている水」という意味で、代匠記、全釈ではこれを涙の譬えとしている。歌を「深くもない間柄の人のことを思って、涙よ、ひどく流れるな」と解釈できよう。このように、前件に現れる人物が、それぞれ後件「旅寝する」「思ひ暮らす」「恋ふる」「戸を開ける」「涙する」といった相手を求める動作の目標・対象であることがわかる。

この類の歌において、「涙する」「思ひ暮らす」「思ひわぶ」「恋渡る」のような精神的に苦しみながら恋している相手を示す歌が7例、「旅寝する」「なづみ来る」のような距離的接近する目標を表す歌が2例、「開けてさ寝にし」という具体動作の対象を表す歌が1例見られる。

以上の①から⑤までのように、「ゆゑ」の各構造の用例が、いずれも精神的に、或いは行動的に追い求める【目標・対象】を示すものとして統一して解釈できる。「ゆゑ」が前接語とともに、後続事態の【目標・対象】を示している。つまり、これらの歌では、「ゆゑ」の前接語が客体化・対象化され、補足語の立場にある。これらの例は、前接語が後続行為をとらせる理由というふうには言えなくもないが、次に述べる【原因・理由】の場合に比較すれば、相違のあることは容易に気づく。

4.2 【原因・理由】

「ゆゑ」が単に原因理由を表す場合、歌はいずれも「ある物によって、ある望ましくない事柄が引き起こされた」と解釈できる。用例が少ないため、全13例を掲げておく。そのうち、〔体言+ゆゑ〕の構造をとっている歌が3例、〔(消極的意味を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕の構造をとっている歌が2例、〔(打消表現を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕の構造をとっている歌が8例ある。

①〔体言+ゆゑ〕3例

- (19) 我が故に (我故) 言はれし妹は 高山の 峰の朝霧 過ぎにけむかも (11・2455)

(20) 凡ろかの わざとは思はじ 我が故に(言故) 人に言痛く 言はれしものを (11・2535)

(21) おのれ故(於能礼故) 罵らえて居れば 青馬の 面高夫駄に 乗りて来べしや (12・3098)

例(19)と例(20)はいずれも、「私のせいで、とやかく噂を立てられた」という意味である。例(21)は「そなたのせいで、叱られている」という意味である。「ゆゑ」の後件は、いずれも受身の形で望ましくない結果を表している内容であり、前件は後件事態を引き起こした原因である。

②〔(消極的意味を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕2例

(22) 朝影に 我が身はなりぬ 玉かきる ほのかに見えて 去にし兒故に(去子故) (11・2394)

(23) 朝影に 我が身はなりぬ 玉かきる ほのかに見えて 去にし兒故に(往之兒故尔) (12・3085)

上記の二首の歌の内容は同じであり、いずれも「ほのかに見えただけで消えた人のせいで、朝影のように痩せてしまった」という歌である。「消えた人」が原因で「痩せてしまった」という望ましくない結果を表している。

③〔(打消表現を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕8例

(24) 紀伊の海の 名高の浦に 寄する波 音高きかも 逢はぬ兒故に(不相子故尔) (11・2730)

(25) いくばくも 降らぬ雨故(不零雨故) 我が背子が み名のここだく 瀧もとどろに (11・2840)

(26) はなはだも 降らぬ雪故(不零雪故) こちたくも 天のみ空は 曇らひにつつ (10・2322)

(27) 行けど行けど 逢はぬ妹故(不相妹故) ひさかたの 天露霜に 濡れにけるかも (11・2395)

(28) はしきやし 逢はぬ兒故に(不相子故) いたづらに 宇治川の瀬に 裳裾濡らしつ (11・2429)

(29) はしきやし 逢はぬ君故(不相君故) いたづらに この川の瀬に 玉裳濡らしつ (11・2705)

(30) 等夜の野に 兎ねらはり をさをさも 寝なへ兒故に(衽奈敵古由惠尔) 母にころはえ (14・3529)

(31) 麻久良私の 許我の渡りの から梶の 音高しもな 寝なへ兒故に(宿莫敵兒由惠尔) (14・3555)

例(24)は「たいして逢いもしないあの娘のせいで噂が高くなったことだ」という意味である。例(25)は滝に寄する譬喩歌である。「たいして降らない雨」は、「度々あってもいないこと」をさし(注釈)、この一首は「大して逢ってもいない人のせいで、噂だけが滝のように大げさに立てられた」という意味である。例(26)は雨に寄する譬喩歌である。「こちたくし」は「言痛し」の約で、人の噂がおびただしい意であり、「大して逢ってもいない人のせいで、人の噂が曇ったようにおびただしく立てられた」と解釈できる。

このように、上記の三首は同趣で、「大して逢ってもいない人のせいで、噂を立てられたこと」を気の毒と思って詠んだ歌と考えられる。この三首は前述した例(19)例(20)と、修飾部分の打消表現を除くと、「噂を立てられた」の意味が同じであることに注目したい。他方で、この打消表現を伴う構造が逆接用法の最も著しい標識とされている。したがって、これらの打消表現が

「ゆゑ」が逆接に解釈されることと関連性を持つと考えられる⁽¹⁰⁾。それは、打消表現の修辞性にあるのではないかと考えられる。この場合に即して言う、打消表現を用いることによって、詠み手の心理的落差をもたらし、人物像をより鮮明に浮かび上がらせる効果があるのである。つまり、「ゆゑ」の前件に現れる人物とはさほど逢いもしていないから、噂が立たないはずだが、事實は、「波が寄せるように」「滝がとどろくように」「大空が曇ったように」噂を立てられたことが対比的に捉えられ、哀切な嘆きを一層、強く描出していると考えられる。このように、「ゆゑ」は逆接用法であるというより、「ゆゑ」によって結ばれる前件と後件が対照的に表現されることにより、後件で自分の置かれた状況を悲しむ心情が際立たせられる和歌的な表現であると考えられる。作者は「たいして逢いもしない人のことで、噂が立てられた」という事実を忠実に述べていると考えられる。このような自分にとって望ましくない状況を表現するとき、「ゆゑ」が未だ実質名詞「差し障り、災い」の意味⁽¹⁰⁾を保っている。また、「ゆゑ」がこのように、前件と後件を対比性・意外性を含む事態としてつなげていることは、上代の「ゆゑ」がまだ因果関係を表す論理的な接続表現となっておらず、偶然性を含んだ契機を示す用法にとどまっていることを示していると考えられる。

例(27)から例(29)までの内容は類似的であり、「逢いもしない人」のせいで、「天の露霜に濡れてしまった」や「川の瀬で裳の裾を濡らしてしまった」という意であり、いずれも逢うこともできない相手を怨みつつ恋い求める歌と考えられる。例(30)は「共寝をしたわけでもない児のせいで、母に叱られた」の意であり、例(31)は「共寝をしたわけでもない児のせいで、噂が高くなってしまった」の意であり、いずれも望ましくない事柄が後続している。

4.1節で述べた【目標・対象】用法の③④⑤も上記と同様な特徴をもつものと考えられる。前接部分に打消表現や消極的表現を用いることによって、目標となる相手の人物像がより具体化される効果があると同時に、後件のこちら側の働きかけの激しさが対比的に捉えられ、「怨みつつ恋する」という矛盾した心理が詠みだされている。これらの歌の「ゆゑ」が逆接に解釈された理由は、「ゆゑ」が偶然的原因を示す面があることに加え、「ゆゑ」の前件に打消表現や消極的表現を用いることによって、前後文脈が対比的に捉えられたためであると考えられる。

5 おわりに

以上、『万葉集』における「ゆゑ」を用いた歌を見てきた。「ゆゑ」には文法上、【原因・理由】を示す用例があるとともに、特に【目標・対象】を示す用例が多く見られた。【目標・対象】を示す用例においては、「ゆゑ」は後続動詞の目標物・対象物に形式的な意味を添え、「……に対して」「……を思って」「……を求めて」のような意味をもつ修飾節を作っていると考えられる。上代の「ゆゑ」が実質名詞的な性格をもち、目標物を示すことができる点で、中古以降の「ゆゑ」と異なる傾向を見せている。

上代の「ゆゑ」には実質名詞の性格が遺存するため、中古以降の論理的因果関係を表す用法とは異なり、偶然的原因を示す表現にとどまっていたと考えられる。「ゆゑ」が逆接用法に解された理由は、「ゆゑ」の前件と後件が、偶然接続的な関係であることに加え、前接体言の修飾語に

打消表現や消極的表現が用いられることによって、前件と後件とが対比的に把握されたためであると考えられる。

中古和文では「逆接」的な用例がほとんど見られなくなったことは、このような用法は、歌という形式に支えられた和歌的な表現にとどまっていたことに原因があると考えられる。つまり、『万葉集』における「ゆゑ」の体言接続の用例は、上代における歌の表現の特殊性の中で生じたものであると考えられる。

【注】

(1) 調査に使用した注釈書は以下の通りである。

万葉集僻案抄（荷田春満）、万葉集旁註（恵岳）、万葉集略解（橋千蔭）、万葉集櫛の柚（上田秋成）、万葉集燈（富士谷御杖）、万葉集攷証（岸本由豆流）、万葉集古義（鹿持雅澄）、万葉集絵孺手（橋守部）、万葉集註疏（近藤芳樹）、万葉集美夫君志（木村正辞）、万葉集新考（井上通泰）、万葉集新講（次田潤）、万葉集釈註（伊藤博）、万葉集講説（次田真幸）、万葉集講義（山田孝雄）、万葉集全釈（鴻巣盛廣）、万葉集新釈（澤瀉久孝）、万葉集評釈（窪田空穂）、万葉集全注釈（武田祐吉）、万葉集私注（土屋文明）、万葉集注釈（澤瀉久孝）、万葉集（日本古典文学大系）、万葉集（新日本古典文学大系）、万葉集（新潮日本古典集成）、万葉集（日本古典文学全集）、万葉集（新編日本古典文学全集）

(2) 澤瀉（注釈）では、「……この人妻故に、自分は心惹かれるといふような事をしようか」と解釈している。また、澤瀉（新釈）では、「……人妻であるあなたを、自分はどのようにしてこんなに恋しく思はうか」と解釈している。

(3) 土屋（私注）では、「紫の美しい色の如くに、にはひやかなる君を、憎いのであるならば、人妻であるのだからその君を吾が恋しようか」と訳している。

(4) 「ゆゑ」の体言接続 62 例には、慣用表現の「何のゆゑ」「そこゆゑ」を含んでいない。また、『万葉集』において、形式名詞として用いられる「ゆゑ」は必ず体言につき、用言につかないという制約があることは橋（1928）によってすでに指摘されている。

(5) 『日本国語大辞典』第二版「ゆゑ」の項には、「前の事柄に対して、結果としての後の事柄が反対性・意外性を持つ場合、逆接的意味に解される。……だのに。……であるが。」とある。

(6) 倉田（2001）は、多様な修飾語が「人」という語にかかる形式は、全体で一語的に働くものであり、凝集性・膠着性に富んだ表現形式であると述べている。この指摘は、「修飾語句＋体言＋ゆゑ」の場合にも当てはまると考えられる。

(7) 日本古典文学大系『万葉集 一』補注 21 では、「……奈良時代のタメの用法を顧みると、奈良時代にはタメの本来の用法は、原因・理由を表すことにはなく、将来の利益を期した目的を表すことであった。……従ってユエ（原因・理由）とタメ（目的）とは明確使い分けられていたのであり、その区別を不明瞭にするような訳語は避ける方がよい」とある。

(8) 『今昔物語集』では、「地蔵菩薩、利生方便ノ為ニ悪人ノ中ニ交ハリテ、念ジ奉レル人ノ故ニ毒ノ箭ヲ身ニ受ケ給フ事……」（巻十七・3）、「此レ偏ニ、地蔵菩薩ノ利生方便ノ故也。」（巻十七・7）のよ

うな用例が散見し、「故」が目標を示す用法である。

- (9) ここで言う〔(消極的意味を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕の例が「ただ一目のみ」のような接触の度合いの少なさを表す語句や、「ほのかに見えて去にし」のような望ましくない状況を表す語句が現れる例を指す。〔「人妻ゆゑに」歌〕と〔(打消表現を含む) 連体修飾語+体言+ゆゑ〕の歌も消極的意味を含んでいるが、出現頻度の高さから、一つの類型となっていると考えられ、別の項目を設けた。
- (10) 塚原(1990)では、否定表現は人物や場面の評価や特性を強く印象づける効果があると述べている。藤井(1994)は、修辭的な文体に否定表現が多く用いられると指摘している。
- (11) 「さなかづら いや遠長く 我が思へる 君によりては 言の故も(言之故毛) なくありこそと」(13・3288)のように、「言の故」は「ことばの祟り」(新編)という意である。

【資料】

本稿の調査には、古典索引刊行会編(2009)『万葉集電子総索引(CD-ROM)』を用いた。用例の引用は、塙書房刊『万葉集』によった。

【参考文献】

- 小川輝夫(1984)「否定表現の原理」『文教国文学』14
- 菊澤季生(1938)「古代に於ける『ため・ゆゑ・から』」『文学』6-5
- 倉田 実(2001)「平安朝恋歌『……人』表現—その傾向と『つれなき人』をめぐって—」『大妻女子大学紀要(文系)』
- 志村健雄(1931)「万葉集『ゆゑに』の解」『国学院雑誌』37
- 塚原鉄雄(1990)「否定表現雑感」『日本語学』9-12
- 橘 純一(1928)「『ゆゑ』の古用について」『国語と国文学』5-11
- 生野浄子(1961)「『ため』『ゆゑ』の意味変化に就いて」『学習院大学国語国文学会誌』5
- 馬 紹華(2015)「万葉集『ゆゑ(に)』の用法について」『日本語学論集』11
- 藤井俊博(1994)「今昔物語集の否定表現—本朝法華験記の増補をめぐって—」『同志社国文学』41
- 吉野政治(1990a)「人妻ゆゑに一逆的に訳されるユエについて—」『万葉』137
- (1990b)「上代のタメについて」『万葉』136
- (1990c)「目標・目的を示す『故』—目的と理由との関係について—」『同女大日本語日本文学』